

ロンボク島大地震のその後と学校支援プロジェクト ～ゆいツールの活動紹介とともに

山本かおり（NPO 法人ゆいツール開発工房 [ラボ]）

立て続けに発生した大地震

現地時間 2018 年 8 月 5 日 19 時 46 分にロンボク島で巨大地震が発生しました。夜 9 時すぎ、日本にいる私にロンボクの親戚から「大きな地震が起こった！」と連絡がありました。北ロンボクを震源とする、マグニチュード 6.9 の地震でした。ロンボクでは、この地震の 1 週間前にもマグニチュード 6.4 の地震（1 回目）が発生していました。

その時には、国立公園にもなっているリンジャニ山（3,726 m）の登山口の村（スンバルン）などが被害の中心で、他の地域の人たちはそちらに支援に行ったり、在住日本人の友人も支援金募集を呼び掛けたりしていました。2 回目の地震では、助けに行っていた他の地域にも被害は広がりました。

さらに 2 週間後の 8 月 19 日の深夜にも、マグニチュード 7.0 の地震（3 回目）が起きました。

立て続けにロンボクを襲った地震の被害は、東ロンボクのリンジャニ山のふもとの地区から、北ロンボクのタンジュンからスナルにかけて、西ロンボクや中部ロンボクの一部の地域に広がりました。

写真 1 西ロンボク グヌンサリ地区クカイ村



ロンボク島について

ロンボク島は、バリ島の東隣に位置し、和歌山県ほどの大きさの人口約310万人ののどかな島です。インドネシア国内有数の観光地で、ちょうど日本の沖縄のように、多くの国民があこがれる海のきれいなリゾート地です。残念ながら、日本人にはまだあまり知られていません。

ロンボク島の特徴は、住民の多く（ササク人）がイスラム教徒であること、海沿いの一部の地域を除いて観光のための開発がまだ進んでいないため素朴な景色を見ることができること、バリ人も住んでいるためヒンドゥー教の寺院なども見られること、雨が多い地域のためお米が年に3回収穫できること、などが挙げられます。文化的には、民族衣装や伝統舞踊などが、バリとよく似ています。



写真2 田園風景



ゆいツールの学校支援プロジェクト

ロンボク島では、地震の震源地に近い北ロンボクと東ロンボクは壊滅的な被害を受けました。これらの地域はもともとロンボクの中でも開発が遅れ、州都マタラム市からも遠く、ゆいツールも訪れたことがあるのは、その中の限られた地域だけです。今回の地震で、ロンボク島で活動するNPOとして、現地のために何ができるか考えたときに、まず誰（どの団体）と一緒にやるか、ということをもっと先に思いました。

ゆいツールは、東京に事務所を置いています。現地で動ける、ゆいツールとつながりのある団体のメンバーで、信頼できる人物…。地震直後から連絡をとっていた、インドネシア・イスラム観光協会（APII）のマストゥールさんと一緒にやろう、と決めました。APIIとは2017年度からのつきあいで、2018年2月にロンボクで大きなフォーラムも一緒に開催しました。マストゥールさんは、APIIの西ロンボクの担当スタッフです。

今回、どこを支援するか、という話をしたときに、「西ロンボクの学校を」を提案がありました。私は正直、被害が大きかったのは北と東で、なぜ西を？を思ったのですが、マストゥールさんの意見は、「西ロンボクの一部（それもマタラム市からそう遠くないエリア）も、多くの建物が倒壊している。しかし、TVなどのメディアは北と東をさかんに取り上げるため、インドネシアの国内の人たちの関心はそちらに向いていて、支援物資も西を通り越して北へ東へ運ばれている。でも、ここにも支援を必要としている人はいる。インドネシアの中央政府は、北ロンボクの支援を約束した。APIIとゆいツールは、西ロンボクでも被害が大きかった、バトゥ・ラヤール地区とグヌンサリ地区の学校を支援したらどうだろうか」というものでした。

それに、西ロンボクであればマストゥールさんの普段の活動地のため、土地勘もあり現地確認に行くのもたやすく、こちらでも情報を得やすい、という利点もありました。また、グヌンサリ地区の一部の村には、ゆいツールが普段お世話になっているごみ銀行やヤシ砂糖づくりの販売者の人たちが住んでいて、状況を把握するのに難しくないと思いました。

学校はどんな状況なのか？聞いてみると、場所によっては校舎が壊れ子供たちは勉強する場所を失ってしまっている、とのことでした。マストゥールさんは、大型テントを提供したい、とすぐに画像を送ってくれました。それは、普段インドネシアの軍隊が使っているテントで、ジャカルタで製造されているものでした。大きさは、幅7m、奥行14m、高さ3mで、子どもが60人収容できます。1ユニットあたり、6,000,000ルピア（約46,000円）（ジャカルタからの送料込み）で金額がはっきり

して、これなら支援金を集めるときにわかりやすい!と思いました。

ゆいツールは早速、クラウドファンディング「インドネシア・ロンボク島地震災害支援～学校に大型テントを届けたい」を立ち上げました。そして、キャッシュカードで振り込みができない人からは、銀行振り込み等で支援金を集めました。8月中旬から9月終わりにかけて、合計約136万円を約200人/団体から集めることができました。大型テントは第一弾で10ユニット購入し、9月中旬に西ロンボクの小学校・中学校・イスラム学校など10校に配布しました。第2弾で発注した11ユニットは、1か月かかってロンボクに到着したところで、11月上旬に西ロンボク、北ロンボクなどの学校11校に配布する予定です。また、テント以外の資材を提供した学校がふたつあります。ゆいツールが支援をした学校の情報は、最終情報を整理したのちに、ホームページに公開する予定です。

写真3、写真4 西ロンボクタマンサリ第3公立小学校に提供した大型テントの使用状況



10月の現地視察

ゆいツールは、地震2か月後のロンボク島を訪れました。ロンボクの空港（中部ロンボク）からマタラム市に向かうタクシーの中からは、大きな被害にあった建物などは見当たりませんでした。

①北ロンボクバヤン地区ロロアン村

バヤン地区に向かう途中通った、北ロンボクのプムナン地区、タンジュン地区は、多くの建物が倒壊しているのが見て取れました。特に、タンジュンにある病院は、外の広場にテントが建ち並び、手術室までありました。テントにはエアコンが設置されていて、少しびっくりしました。

写真5、写真6 タンジュンの病院



ロロアン村では、テントが必要な学校がいくつかあるか調べて回りました。最初に行ったのは、ロロアン第一公立小学校でした。建物が崩れず残っていたため、支援が後回しになっている様子でした。建物が崩れていなくても、ひびが入ったり天井の一部が落ちていたりするため、先生方は怖くて生徒を教室に入れられない、と言っていました。その後、いくつか学校を見て回ると、全壊した学校には政府などから大きなテントが支給されていたり、建物が残った学校も机と椅子が外に出してあったり、中には仮設の教室が建築中のところもありました。

ロロアン村では、地震での死者はひとり、という話でした。集落長さんが子供を守ろうと腕をけがして、失血のため亡くなったと聞きました。

写真7 ロロアン第一公立小学校



写真8 インドネシア国家災害庁のテントが提供された学校



写真9 外で勉強している学校



写真10 行政と民間の支援で建てられた仮設教室



②東ロンボク スンバルン地区

スンバルン地区は、今回の地震で最も被害が大きかった地域のひとつです。標高1000mの高地にあり、朝晩は冷え込みます。すべての建物が崩れているわけではなく、場所によって被害が大きかったところ、たいした被害のなかったところに分かれていました。家を失った人たちは、テント暮らしを強いられていました。テントはブルーシートを使ったものでしたが、イスラム系の団体がジャワ島からやってきて作ってくれたそうです。

政府と民間による支援で建てられた仮設住宅もありました。しかし、川のそばや、雨季になると雨が溜まる空き地に建てられていたので、この先のことが心配になりました。

写真11 ブルーシートで作られたテント



写真12 テント傍に設置された公衆トイレ



写真13 仮設住宅（スンバルン・ブンブン村）



写真 14 仮設住宅を建築した行政と民間のロゴ



学校も見ましたが、建物が大きく崩れ、テントでの勉強を強いられていました。仮設教室が建築中のところもありました。

③西ロンボク グヌンサリ地区

グヌンサリ地区では、まずクカイ村の住宅地を見て回りました。いつも、北ロンボクへ行くときに峠越えをする山の手前の、マタラム市から車で10分ほどの幹線道路に車を停車して、住宅の間の細い道を通って奥へ入ると、斜面にへばりつくように村が広がっていました。幹線道路からは全く見えなかったため、ここに村があることを私は初めて知りました。主に貧しい人たちの集落のようで、ほとんどの家が全壊か半壊の被害を受けていました。まるで戦後のバラックのような、適当な板

写真 15 クカイ村の様子



で作った掘立小屋があったり、がれきの処理が追いつかずにほったらかされていたり、水のタンクが設置されていたりしました。

また別の日に、学校の様子を見て回りました。と言うのも、この地域の学校へテントを提供する予定だったからです。しかし地震から時間が経ち、学校によっては別の支援が入っていることも予想されたため、テントが必要な学校を洗い出す必要がありました。見に行くと、立派な仮設教室で授業が行われている学校がありました。クカイ第2公立小学校は、

PKPU human initiative という団体の支援が入っていました。また、別の学校には大きなテントがすでに支給されていて、その隣に仮設教室が建築中でした。

クカイ村のア・タジブイスラム学校は、広い敷地の中に建物の影はありませんでした。これから立て直しをするのでしょうか。生徒たちは姉妹校の空き地に張ったテントで勉強していました。この学校には仮設教室もありました。また別のイスラムの学校を見に行くと、PMI（インドネシア赤十字）のマークのついた白いテントが建てられていました。軍隊用の大きなテントも建っていましたが、先生に聞くと勉強道具を入れてある、という話でした。何か必要なものは？とたずねると、「扇風機

写真 16 水のタンク



写真 17 クカイ第2公立小学校の仮設教室



写真 18 ドパン第一公立小学校のテント



などがあつたら」という返事でした。

今回、あちこち見まわった時に聞いたのは、「テントが暑い」という話でした。特に天井が低いテントは、風が通らず（両側の覆いを上げることもできますが）、熱がこもって朝の10時を過ぎる頃には暑くなりすぎて勉強にならない、と聞きました。そのために、テントを購入する予定だったお金の一部を、扇風機購入に充てる予定です。西ロンボクは、州都マタラム市のおひざ元なので、やはりある程度支援の手は届いているのを感じました。

写真 19 ア・タジムイスラム学校の敷地



写真 20 テントで勉強するイスラム学校の子供たち



これまでのゆいツールのロンボク島での活動

ゆいツールは、2013年度よりロンボク島で環境教育活動を行っています。一番の目的は、ロンボク島のごみを減らすことです。そのため、「ごみ銀行の支援」に力を入れてきました（くわしくは『インドネシア・ニュースレター』88号を参照）。現在は、「村ツーリズムの開発」を行っています。これも、ごみを減らすことが最終目的です。（「ごみ銀行」とは、インドネシア独自の廃品リサイクルシステムで、住民からごみを集めてお金に変える活動のことです。）

日本の若者がロンボクの村に滞在して、村の若者と一緒に村の暮らしを体験したり、ごみ問題を一緒に考えたりすることで、村ツーリズムという手法を使って村を発展させられるということ、そのためには環境や文化を守ることが大切だということ学びます。また、併せて村の若者たちの人材育成もを行っています。

2018年2月には、「村ツーリズムの発展のためのフォーラム」をマタラム市で開催しました。100人近い参加者が集まり、「ごみ銀行の活動紹介」「村ツーリズムの手法、利点などの紹介」をして、「村ツーリズムの発展が村の発展につながること」などを確認しました。

ゆいツールの活動はごみ問題に対処する単なる環境教育ではなく、根本には持続可能な社会形成につながるESD（持続可能な開発のための教育）の考え方があります。そのため実施する諸活動すべてに持続可能な開発を考える場が創出され、若者や関わる人の学びの場となっています。

写真 21 村でのごみ調査の様子 (2016 年度)



写真 22 村の暮らし体験 (2017 年度)



イスラム教徒が安心して訪れることができる島へ

ロンボク島の属する、西ヌサトゥンガラ (NTB) 州の州知事は、ロンボク島を観光地として発展させようと力を入れてきました。観光客が多いエリアは、北ロンボクの離れ島 3 つのギリ島 (ギリとは、ロンボクの言葉で島を意味する) で、ギリ・トラワンガン島、ギリ・アイル島、ギリ・メノ島と、西ロンボクの海岸沿い (スングギ・エリア) です。島の南側にあるクタ周辺は、サーフィンスポットとして人気があります。

ギリ島はバリ島からスピードボードで観光客がやってきて、ロンボク本島には寄らずにトンボ帰るのが一般的です。ギリ島やスンギギの観光客、クタのサーファーの多くは欧米人で、彼らのために観光地にはアルコールが置かれ、欧米人は肌を露出した格好で歩き回ります。私たち日本人が訪れてそれを見ても、「素敵な南の島」と感じるだけですが、現地のイスラム教徒にとっては実は、忌々しきことなのです。ロンボク島は、インドネシア国内からも多くの観光客が訪れます。そして、その多くはイスラム教徒です。

ロンボク島は、長い間隣で観光地として発展し続けるバリ島を苦々しく眺めてきました。あんな風に、ロンボク島も発展したい。お金が欲しい。でも、欧米の文化が入り込みすぎることについては、大きな抵抗がありました。そこで、今ロンボク島では、「ハラル・ツーリズム」を拡げようという動きがあります。

ハラルとは、イスラム法において「許されていること」で、ゆいツールが協働している APII はハラル・ホテルの認証をしています。ハラル・ホテルとは何か聞いてみると、「夫婦以外の男女を泊めない」「アルコールを置かない」など、イスラム教徒が安心して泊まることができる条件をクリアしているところだそうです。

このハラル・ツーリズムを広めることで、ロンボク島はバリ島と差別化を図り、おそらく中東からの観光客にもアピールしていくのだらうと思います。とは言っても、現在のところは欧米からの観光客によって観光経済が支えられているため、完全にイスラム教徒向けの観光地、となることはないでしょう。両者が上手に共存できれば、それが一番ではないかと私は考えています。

おわりに

被害が広がった2回目の地震があったのは、夜のまだ早い時間でした。もし昼前に起こっていたら、子供たちが学校にいて倒壊した建物の下敷きになっていたかもしれません。またもし、人々が就寝した後の時間だったら、すぐに外に逃げ出せずに、もっと被害が大きくなっていただかもしれません。ラマダンが終わっていて、乾季の間であったことも不幸中の幸いではなかったか、と私は感じています。ロンボク島は雨季になると、毎日のようにたくさん雨が降ります。雨季の真最中に地震が起こらなくて本当によかったです。

ロンボク島で最初の地震があったちょうど1か月後の9月28日18時2分ごろ（日本時間同日午後19時2分ごろ）、インドネシア・スラウェシ島の中スラウェシ州でマグニチュード7.4の大きな地震が発生し、地震に伴う津波も沿岸部に押し寄せま

した。ロンボクの地震と、このスラウェシ島の地震では、大きく違う点がありました。それは、ロンボク島は公式な海外支援を受け入れず、スラウェシ島は受け入れた、ということでした。この点を判断するのは、州知事だそうです。NTB州知事は、先に述べたようにロンボクの観光に力を入れようとしています。海外支援を受け入れると、観光客の足が遠のく、と考えるインドネシア国内の力でなんとかしようとしたようです。

そういえば、地震直後にジョコ大統領が「被災した家について、全壊は5000万ルピア（1円は約133ルピア）、半壊は2500万ルピアを保証する」と約束したそうですが、10月の時点で北ロンボクも東ロンボクも西ロンボクも、お金を受け取っている人はいませんでした。東ロンボクのスンバルン地区で聞いた話は、家を再建する住民が10人から15人のグループを作って、住宅再建計画を行政に示し、その後リーダーの口座に段階的に材料費を購入するためのお金が振り込まれる、というものでした。

でも、実際にそうやってお金を受け取っている人はまだいませんでした。そしていつの間にか、保証される額が、全壊も半壊も2500万ルピアになった、と言っていました。北ロンボクである人に話を聞いた時には、お金はきつと国から州へ、州から県へ、県から地区へ、地区から村へ降りてきている間に、抜き取られて半分くらいなくなっちゃったんじゃないの、と自嘲気味に言われました。ゆいツールのカウンターパートのNGOスタッフは、「ロンボクの住民はもう、保証金についてほとんど期待していない」と言っていました。

フランスのNGOがロンボクにあてて送った150個の大型テントが、郵便局で受け取れず、持ち帰った、という話もありました。外国のものをインドネシアに入れてはならない。支援したければ、お金を送ってインドネシアのものを購入するように、と言われたとか。また、ピース・ウインズ・ジャパン（PWJ）という日本の団体が、地震直後に捜索用の犬を連れて現地に行き、結局活動を断られた、という話も聞きました。その後この団体は、インドネシアの救援団体ACT（Aksi Cepat Tanggap）に協力して仮設住宅の建築費を支援したり、給水活動を行ったりしていました。

今回の地震災害支援でゆいツールが学んだことは、具体的な支援を、現地の団体と協働で行うことの大切さでした。そして、細部に気を配ること（現地からの一方的な情報を鵜呑みにせず、確認すること）。また、最初に決めたことも、変更の余地があると覚悟して、早めに現場を確認することです。普段から、色々な場所を訪れて、色々な人と知り合っておくことも大切なことだと感じました。一回訪れていた場所は、災害があっても変わっても、その前の状況と比較することができます。人とのつながりがあれば、助けに行くことも、情報を聞き出すこともできます。

今回、ゆいツールのロンボク島地震災害支援プロジェクトにご支援いただいた方々には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【编者あとがき】

この記事は『インドネシア・ニュースレター』99号のため2018年11月初めに執筆されたものですが、99号の編集作業が大幅に遅れたため刊行が5ヶ月ほど後になってしまいました。そのため、現状とは違いが生じている点もありますが、そのまま掲載しました。遅延によりご迷惑をおかけしたことについて、筆者の山本かおりさんと読者の皆様にお詫びを申し上げます。



第96回 JANNI 連続講座「ロンボク大地震のその後と学校支援プロジェクト」
(講師：山本かおりさん、2018年12月1日開催)の様子